一

問一

都会の生活と別れ、私にも思い出のある山村に移住した友人をうらやましく思いつつ、移住の経緯が不明でもあり、友人をねたんだり非難したりできないということ。

（解答欄３行）

問二

行き先も決めず、季節の風情を全身で思うがままに味わい、それに誘われて歩く、気ままでゆったりとした旅。

（解答欄２行）

問三

柿を採る農夫のしぐさや手にした柿の見栄えに、かすかな違和感を抱いたが、いざ柿を勧められてみると、農夫の飾り気のない親切心が素直に心に沁み込んだから。

（解答欄３行）

問四

旅先で出会った山村では、秋ののどかな時間にだけ優しく高貴な光がふりそそいでおり、それは土地の人には気づかれなくとも、光やその色合いに物語を感じる私には、太陽の秘かで特別な慈愛であるかに感じられたから。

（解答欄４行）

©河合塾　2017年

二

問一

言文一致体は、表情や身体所作、省略を伴いつつ話者の主観を伝える口語を模したものなのに、物事を精密に描写しうる最も客観的な表現手段だとみなされたから。

（解答欄３行）

問二

物事を客観的に描写すべく、話者を隠す言文一致体の技法を発達させた結果、叙述に空白や秘匿が生まれ、逆に読者の恣意的な想像を掻き立てることになったから。

（解答欄３行）

問三

話し言葉が抱える話者の排除という矛盾への疑問から生じた一人物の視点を通して描写すべきだという主張を突き詰めれば、一人称の「私」を話者に立て、その主観的判断として作品世界を統括することが最も理に適うから。

（解答欄４行）

©河合塾　2017年

三

問一

時々は病気がよくなっているように見える時もあったので、いくらなんでも最後にはすっかり病気が治って気分がよくなるだろうとばかり思い続けていた。

（解答欄３行）

問二

今まで作者が友人の死去や追善供養に詠んだ哀悼の歌はたくさんあるけれども、今回の敦化の死の悲しみを詠んだ歌ほど痛切なものはないということ。

（解答欄３行）

問三

作者は、春になって敦化の病もよくなったようで、山遊びに出かけられそうだと楽しみにしていたから、春霞が立つ頃に敦化があの世に旅立ち、死出の山を越えるとは予想もしていなかったということ。

（解答欄４行）

©河合塾　2017年